

忠信

古名

空腹

世阿弥作

ワキ

伊勢三郎

ツレ（判官）

源義経

シテ 佐藤忠信

ツレ（数人）

法師武者

季は

雜

地は

大和

「是は判官殿の御内に。伊勢の三郎義盛にて候。さても我君判官殿は。此吉野を頼み御座候ふ処に。衆徒の詮議かはり。今夜夜討うつべき事一定のやうに申し候ふ間。此事申し上げばやと存じ候。如何に申し上げ候。義盛が参りて候。

判官「此方へ來り候へ。

ワキ「畏つて候。

判官「さて唯今は何の為めに來りて有るぞ。

ワキ「さん候唯今参る事余の儀にあらず。当山の者ども心がはりし。今夜夜討を討つべき事一定のやうに申し候ふ間。此事申し上げべき為めに参りて候。

判官「是は誠にて有るか。

ワキ「さん候。

判官「口惜しや我幾ばくの難を逃れ。命を重んずる事も。朝敵の虚名を晴らさん其為めなり。それに当山の衆徒夜討すべきを告げ知らする条。是れ偏へに天

の御加護なり。とにかくに我は夜に入り此所を開くべし。誰か一人留まり防矢を射。其後命を全うして。路次にて追つ付くべき者やある。義盛はからひ候へ。

「御詫畏つて承り候ふさりながら。某を始め皆いづくまでも御供とこそ存じ候ふべけれ。恐れながら誰にても召し出だされて。直に仰せ付けられよかしと存じ候。

「それこそ我等が思ふ所なれ。さらば佐藤忠信を此方へと申し候へ。

「畏つて候。

「如何に此屋の内に忠信の渡り候ふか。

「誰にて渡り候ふぞ。

「君よりの御使に義盛が参じて候。少し御用の事候

へば。御参りあれとの御事にて候。

「畏つて候。

シテ

ワキ 「忠信参りて候。」

判官

「いかに忠信。当山の者ども心がはりし。今夜々討

すべき事一定のやうに申し候。とにかくに我は夜に入り此所を開くべし。汝一人留まり防ぎ矢を射。

其後命を全うして。路次にてやがて追つ付き候へ。

シテ 「御諫畏つて承り候ふさりながら。某が事は何処までも御供に召し具せられ候ひて。余人に仰せ付けられ候へ。若し辞し申す者あらば。其時御意をば

背き申すまじく候。」

判官

「いや汝を頼む上は。とかくの事はあるまじく候。

シテ 「御意をばいかで背くべき。しかも一人撰まれ申し。

防矢仕れとの御諫。弓矢取つての面目なれば。忝なうこそ候へとよさりながら。我君を始め奉り。皆人々に御名残こそ惜しう候へ。

地 「不覚の涙をおさへて。御前を立つ。皆あはれにぞ覚ゆる。」

地 「かくては時刻移るとて。／＼。我君を始め奉り。

門前を出でゝ間道より。ひそかに忍び出で給へば。

シテ 「忠信暫しは御供し。

地 「御暇申し留まれば。かまへて命を全うして。御供に参らずは。不忠なるべし心得よと。涙を流させ給へば。忝なしと忠信は。唯ひとり留まる心の。便も涙なるらん。／＼。

法師武者一声 「吉野川。水のまに／＼騒ぎ来て。波打ち寄する嵐

かな。

詞 「いかに此坊中へ案内申し候。

シテ詞 「今は夜更け人静まるに。案内申さんとは如何なる者ぞ。

法師 「わりなく頼朝よりの仰せに隨ひ。当山の者ども判官殿の御迎へに参りたり。とう／＼出でさせ給ふべし。

シテ 「あらはかぐしや忝なくも。我君に思ひかゝらん

とや。よし先軍のこゝろみに。此矢一筋受けて見よと。

地「高櫓に走り上り。く。中差取つて打ち番ひ。よつ引いて放つ矢に。真先かけたる武者数多。一矢にどうところべば。目を驚かし肝を消して。一度にどつとぞほめたりける。

地「刀を抜き持ちて。く。弓手の脇より馬手の脇へ。一文字に切るとぞ見えしが。空腹切つて櫓より。

後の谷にぞころび落つ。敵の兵これを見て。寄れや者共首を取れと。一度にばつと寄り。打ち破り乱れ入り。をめき叫んで震動すれば。

シテ「其隙に忠信は。

地「其隙に忠信は。かねて用意の小太刀おつ取り。ひそかに忍び出で。茨からたち。分けつくりつ慕ひ行くを。怪しむる者有りて。あれは如何にと呼ばゝりかくれば。地に伏し隠れ。闇きを便に忍ば

んとするを。遁すまじと。走りかゝつて払ふと見
えしが。真向破れて二つになれば。つゞく兵大太
刀かざし。打つ太刀を受け流し。諸膝かけて切り
放し通つて。今はかうよと遙かの谷を。蝶鳥の如
くに飛び翔り。蝶鳥の如くに飛び翔つて。都をさ
してぞ急ぎける。